宇仁郷通信

No.154
令和４年(2022)5月

発行：宇仁郷まちづくり協議会（編集:情報部会）

花苗のポット上げ作業を実施しました

前日の雨が上がった3月20日、青野町の桜井ハウスにおいて今夏の花苗を、ボランティア15人でぬかるみの中「大きくなーれ、大きくなーれ」と願いつつポット上げ作業を行いました。

宇仁地区の皆様には、日日草、松葉ボタン、星のような可愛いペンタス等の花が既に届いていると思います。（4月30日配布予定）

今回は善防公民館で活動されている“花と緑の会”の代表高橋一彰さんたち3人の方が、ポット上げ作業の見学に来られ、作業の手順や方法等の様子を見ながら、土や苗の購入方法、購入先などを詳しく聞かれました。種蒔きしても暑さで発芽率が極めて悪いこと、また、場所がないため水やりなどの管理を各会員の方が持ち帰って行っているなど、苦労されているお話を伺いました。お互い花を育てる楽しさ、難しさ、地区が花いっぱいになるうれしさなど共通点があり、「参考になりました。これからも頑張ります。」と言って帰られました。

なお、花と緑の会は、花作りや寄せ植え等を通して仲間、地域づくりの充実と生きがいを図る目的で平成7年から活動されています。多い時は30人の会員がいましたが現在は14人で、花苗を種まきから育てて楽しむ他、寄せ植え、苔玉、テラリウムなど、また常に新しい作品作りに取り組んでおられます。活動は毎月第4月曜日（原則）の9:00から12:00まで、興味のある方は善防公民館までお問合せくださいとのことです。

（花畑街道部会）

小印南村の誕生

穂積陣屋門（現了徳寺山門）

「ならんと言ったら、ならんのだ。かえれ、帰れ」 三人の男たちが、ひっしに何かをうったえています。役人たちは、本気で怒りはじめました。なかには、長い棒をかまえる者もいました。

ここは、加東郡穂積村（現滝野町穂積）にある八木但馬守の陣屋の門前です。陣屋とは、武士が領地を治めるために作った役所のことです。男たちは田谷村の百姓でした。田谷村といっても本村ではなく、ずっと南にある小印南分とよばれる出村の者たちだったのです。かれらは、このところ毎日のように陣屋へやってきていました。願いごとは、小印南分を一つの村として認めてほしいということでした。この人たちは、ずっと昔、田谷村からやってきて田畑を開いたのです。そのときは数軒しかなかったので、本村の一部として暮らしてきました。ところが、今では四十軒あまりにふえたので、一つの村として認めてほしいと願い出ているのでした。というのは、村の寄合いでも共同作業でも、遠くはなれた田谷村まで行かねばなりません。

とくに皆の不満がばくはつしたのは、年貢米を納めるときでした。積みだす船着場は、坂を下ってすぐの河高村（現滝野町）であるのに、わざわざ本村の郷蔵（共同倉庫）まで運んでまた引きかえして河高村まで持って行くのです。おまけに、本村の人たちからは「出村の百姓」という軽べつの目で見られていました。

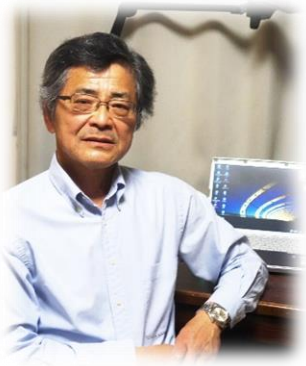
そんなことから、なんとか一村として独立したいと陣屋へ陳情をくりかえしているのでした。しかし、役人たちは許してくれません。独立をみとめるとかれらの仕事の量がふえますし、江戸の将軍さんへの届け出がたいへんだったからです。「なんべん来ても、むだだ」「もうくるなよ」 上役から言われている門番の役人たちは、すごいけんまくで追っぱらいました。しかし、百姓たちもひっしでした。棒でつつかれても、なぐられても毎日ようにやってきました。その数は、きまって三人ずつでした。その頃、四人以上で行動すると、徒党を組んでの強訴とみられるからです。強訴とは大勢で役所へ押しかけうったえることで、これは死刑がきまりでした。

こうしたことが半年あまりも続いた秋のこと、殿さまが江戸から陣屋へ帰ってきました。そして、百姓たちの願いを耳にしてかわいそうに思い、ききとどけてやるように役人たちに言いました。殿さまが許したのでは、しかたがありません。しぶしぶ独立をみとめました。

百姓たちのねばり強い嘆願は成功し、はれて小印南村が誕生したのでした。享保二年（1717）のことと記録されています。

～加西市の民話と史話より原文のまま転載～

宇仁小学校の思い出 ⑬



私が教頭として宇仁小学校に在職していたのは、平成21･22年度の2年間でした。特に21年度には5月に新型インフルエンザ感染者が兵庫県下で確認され、学校、公共施設が休校･閉鎖され、5年生の自然学校が急遽中止になりました。平成22年度には、卒業式の練習を始めようとする3月11日に、東北地方太平洋沖地震による津波と福島第一原子力発電所事故がありました。そんな2年間の宇仁郷まちづくり協議会との思い出を簡単ですが綴らせていただきます。

まず、何よりも協議会を身近に感じられたのは、構成員の多くの方がかつて宇仁小学校で送った教諭時代の保護者の方々であったことです。学級委員をしていただいた方、保護者として気さくに話をしてくださった方など、感謝と懐かしさと親近感とで抵抗なく楽しく関わらせていただきました。

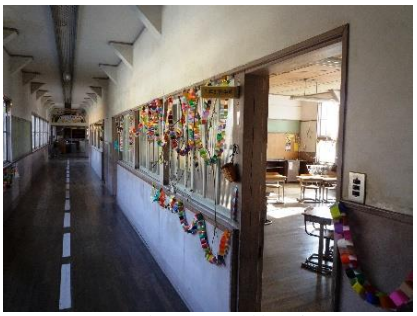
次に敬服したのは、会長をはじめどの部会の関係者の方々も私を捨てて献身的に活動を推し進めておられたことです。特に毎日関わらせていただいた子育て部会の方々の学童保育事業でそのことを強く思いました。保育当番の日には1時半頃に玄関先まで低学年の子ども達を迎えに来られていましたが、おそらくこの時間に活動に就こうとすれば、昼食もそこそこに準備をされていたことと思います。頭の下がる思いで子ども達を引き渡していました。しかし、そんな毎日の中でも、保育希望者と実際の人数とが合わないことが度々ありました。そんな時、どの当番の方もうやむやに済まされず、人数が合うまで引率を始められませんでした。そしてみなさん「大事な子どもを預かるのだから適当なことはできない」と毅然と言われていました。本当にご迷惑をおかけしました。

私が関わらせていただいたどの部会も、部会長さんだけでなく活動に参加されているどの部会員さんも、上記の学童保育関係者の方と同じように真摯で献身的な活動姿勢をもっておられました。頼まれたから顔を出しているという嫌嫌活動ではなく、宇仁小学校の建て替えを含めた住みよい宇仁の郷づくりへの熱意が心の中にあったからだと思います。

菜の花まつり、コスモスまつり、里山の樹木の名札つけ、ホタル再生活動等々、私にすればどれも第三者的な活動でしかありませんが、それぞれを推進される方々との関わりを通して、教頭という立場ではなく、一個人として協議会に関わり貢献したいという気持ちになっていました。　（H21.4.1～H23.3.31教頭　益田正晴）

宇仁郷のあゆみ　第二章 宇仁郷まちづくり協議会の群像達②

新校舎建設遅延の対応に苦慮（1）



取り壊し前の旧校舎内

話は前後しますが、平成15年3月9日宇仁小学校新築期成同盟の報告会が開催されました。当時の議事録より関係者の学校建設に対する熱い思いを紹介します。

・開会の言葉（小川　賢会長）

「待望の宇仁小学校新校舎が平成15年に新用地に建設される運びになっていたが市の財政事情から建設時期が未知数の状況になりました。平成7年に宇仁小学校建設促進協議会を設立し、平成10年7月3日には事業の促進を図るため協議会を期成同盟に改組し今日に至っております。本日は用地買収から造成地の登記、家屋の立ち退き移転に至る経緯を踏まえ、これからの取り組みについて意識を合わせたい。」

・民輪政洋（元PTA会長）

「8年前よりこの問題に取り組み、この度用地買収が終わったことは喜びたいが、市長の宇仁小学校不要論を聞くにおよび怒りを覚える。①小学校は心のふるさとである。②建設促進に皆さん方が強い精神的バックボーンを持つ必要がある。③本校は建設後45年を経過し老朽化している。④このことを本日出席の議員がどのように受け止められ、どのように取り組まれてきたのか、これからどう動かれるのか決意のほどを聞かせていただきたい。」

・民輪芳昭（元PTA会長）

「宇仁小学校の卒業生を自負している1人だが、市長は財政が苦しいと言っているが、聞くところによると本校体育館の屋根が落ちたとも聞いている。災害が発生すればどうするのか、45年経過した老朽校舎をどう認識するのか。まずは多加野地区の5人の議員に頑張っていただき、財政難と言うなら税の使い方にもメスを入れて欲しい。また多加野はひとつとして市、区長会、PTA、婦人会、各種団体が集まるシンポジウムを開催して気運を盛り上げていこう。」

―次号につづく―